

酒典童子若壯しゆてんどうじわかさかり

万治三年（一六六〇年）刊。山本九兵衛板。

伊吹山などで活躍する酒呑童子の若き日の物語で、越後の武士の子である悪童丸は戸隠明神に祈って得た子であり、悪童丸は戸隠に巣くう盗賊の頭となり、朝廷とも争い、魔ま敬修羅王の助力によつて酒呑童子となる。次に原文を交えて粗筋を記す。

桓武天皇の御代、越後の国、寺泊に、石瀬の前司俊綱と
かんむ てらどまり いなせ ぜんじとしつな
いう武士の子に悪童丸という乱暴者がいた。

此わかゆらひをくわしく尋るにとしつな四十のゐんにをよぶまで子のなき事をかなしみしななゝ国とがくしの明神に百日まふでしまんずるあかつきくろがねの大じやきたつてたいないにやどるとみてしゆつしやうしたる子にてありさればにやはくわいにんの内五こくをきらひくろがねをしよくし十月になれどもさんのみちもなく三年三月と申にむまれ出たるわか君なり国一ばんのくせものにて父母のせ

いごんをもきゝいれずひゞにあくじをこのみけり

両親は仏道に精進させ、慈悲の心をもつようと国上くがみの寺に預けたが、法師達と争い、寺に火をかけると、信濃の山へと落ちて行く。

さる程にあくどう丸くがみの寺を出しなのゝ国とがくし山へと入給ふかゝる所にしなのぬす人といふこんげんはいかなればうすい小県たかいちくまといふ所よりむまれ出しも
の共也まづ一ばんにいはらひやうとうとらさきぜんきくまさき太郎石原てつさくとしてうぢけいづよろしきもの共なる
がそのむまれつきぶとうほういつのあらものなればとかく
よの中にたうぞくといふ事はもとでもいらざるよきすぎあ
ひとかれら四人が大将にてしたがふけんぞく三百よ人とか
くし山にたてこもりゆきゝのものをぞはぎ取けり

悪童丸はこれらの盗人を打ち負かして頭領となり、一党は近隣を荒らし回る。そこで「くにの大将かたぎりたてわきときさだ」は都に訴え、「せつつの国大田のはんぐはん盛十にいづみかわちのせい三千よき」が戸隠に下向して、悪童丸一党と戦いになるが、悪童丸だけは討つこ

とが出来ない。そこで悪童丸の父母を人質として捕らえ、悪童丸を都の牢に入れるが、折をみて悪童丸は「なむとがくしの明神と心の内にくはんじ」て牢を破ると戸隠山に戻る。

めづらしからぬあくどう丸又しなのゝ国とがくし山に上りせけんのむじやうをくはんじつくぐと思ふやうげに日本はじまりて我にましたるゆうりきまつ代までも有ましき九つの年よりいたせしゆうりきかそふるにいとまなしあるひはつかみひしぎし人をそらくは十万におよぶへし天ちくしんだんもろこしまでも心にかゝるものもなしとて大かうまんぞいできけるかゝる所に十四五なる小法しこつぜんときたつてなふ御みはあくどう丸といふ人か力万人にすぐれかうまんするときいて有されば人ことには成まし上こすものゝ候へし我と力をくらべ給へにつことわらひて申けりあくどう大にはらをたてすいさんのほうしめや八つざきに引さいてわが力をみせんとずんど立て力こぶをなでいらかしとびかゝつてむずとくむゑたりやあふと中に引さげこくうをさしてぞ上りけるあけくたつの原に出しばしや

すらふ斗也ほうしとみえしはさはなくてかうの衣にけさを
かけまなこはかゞみのてるにて口ばしとびのことく也さん
のしやくを持給ひあくどう丸にむかつて我は是大たうの天
ぐぜかいぼうとは我事也汝かうまんふかきゆへ天ぐみちに
立けるぞあくどう丸聞て扱はさやうに候なさて此国はいづ
くの程にて候ぞむしきかいにて有けるぞいまにまわうのじ
つけんし三ねつのくるしみを汝にみせんしばらくも是にあ
れよとこかげに立より時のうつるを待みたりあんのことく
にはかにこくうしんどうしまわうのともから出にけりすさ
まじかりける次第也をのくせきにすはりし時あくどうき
つとみ給へはざじやうにすはりしまわうはそもこがねのき
よくぎにすはりけり其かたちは一丈斗まじり八かくにさけ
ひけさうにおいはかりかしらはやしやのことくにて出たつ
たりし有さまはとうよくむさんのよろいきしんいぐちのす
ねあたしこうりのやうなるほこを持ときくいきをつくた
びに口よりくはゑんをはつともえくろけふり天にたつ右の
座上にまなこ五つ有ておもてにしゆをさしたるごとくにく
ちわき両のみゝまでさけくいちがへるきばはきじんのこと

くにて月ひにぎつてあたりをはらつていたりけり左のぎに
はいろくろくひげもまゆげもしげりときんまへはんにか
大弓大やをよこたへて四方をにらんでゐたりけり扱それよ
り引きがつてあるひはまなこ三つ二面のものも有てあし六
つありどうぐ引きげてれつと引てぞゐたりけるあくどうふ
しぎに思ひ天ぐにむかつて抑上座にましますは何と申まわ
う候やぜがいきいてあれこそしんいかうせいの大まわうの
かしらしきかいにすみ給ふまけいしゆらわうとかたらるゝ
扱右の方の上ぎにじつ月をにぎり給ふは扱いかにあれこそ
天ち天わうのぎように天下をくらやみとせしふぢ原のちか
た左の座上大弓もちしはひかみのかわうつぎにまなこ五つ
あつて八つしたのほこつきしはそがのいるか扱二面にてい
ろあをきはきよみ原の天王をいうしなはんとせし大ともの
わうじ両て六つ有ていろしろくかみ下さまにみへたるは汝
しらずやようめいの御代に有し大せきの山まる其外はかぞ
ふるにいとまなしあくどう丸とぞおしへけるやゝあつてし
ゆらわうたれか有といへはかぶとのまつかうに大六天のま
わうとくろがねのいたにきん字かきたるがつゝしんてかし

こまる大王のたまはく何とやらん人かぎのいたすはつれて
参れかしこまつたりとかしこをみてゑゝせがい殿の御入候
さだめて日本のをん人ぐして御参りあるないそぎめしつれ
御出あれよぜがいあくどう丸を出さるゝあくどう少もをく
せずつゝと出るまわう御らんじきよげ成わかものかな汝か
やうになみいたるがんぜんをとをつてみよあくどう丸承り
誠にりゝしき有さまにてまことつくにふせ申さばまわうの
四五人もかいつかみみぢんにせんはやすからんといだけた
かにのびあがりさらぬていにて御前をいとしづやかにぞと
をらるゝしゆらわう御らんじあつかうなりとよ汝か心のう
ちにはいぎにをよばゝまわうの四五人もくみとめしなんと
思ふがまん有ひすべしくしからば汝日本にかへりなは則
おにのかたちと成べししばらく天かにあたをせん力をそへ
てゑさすへし国どをやみといたすへしつうをさづけんと有
所にこくう俄にしんどうしすはや三ねつのじこく也いかに
あくどう天人の五すい人間の八つく我はまた三ねつのくる
しみ有日に三どねつてつのゆをのむ也是くるしみの第一也
すははやみよとの給へは天よりどうしのあま下りこがねの

てうしにしろかねのさかづきもち大王に奉るしゆら王おつ
取かたぐにやゝしばらくしきだい有一つうけてさらりと
ほし次第くにもりながしどうしはこくうにあがりけりし
ばらくあつて霜のとくるごとくあつといふ音もろ共にかた
ちみなくきへにけりけふり天をかすめおもかげ少もみも
わかづあくどうふしぎに思ひあんかんとみてあれば月の出
ることくにてをのくあらはれ給ひくるしげなるいきを一
どにほつとふきけるはみのけもよたつ斗也しゆらわうしば
らくいきをつぎいかにあくどう此くるしみをよくみよやと
かくことばにのべられずいでく汝が一せをかたりきかす
べし汝忽ちごにかへりなば天より四人のおに下りなんぢが
しんかと成べしそれよりひ忽い山にのほるへしされどもで
んげう大しといふほうし山をおいいだすへしそれよりかう
やさんに上るべし爰をもこうぼうといふ曲者ふうじてをい
出したんばの大忽山にしばらくすまんず去ながら此みかど
より十六代にあたつて一条のいんの時せつつの守らいくわ
うといふ者いでき是汝がために大てき也したがふらうどう
有へし中にもわたなべのつなといふもの汝がらうどういば

らきといふおにとたびくにとたゝかふへしよく心へよ身一代の大事也汝日本にかへりていまいふことば打わすれむちうむゑんの心体成へし然共まわうかげ身にそひ力をそゆべしはやかへれあくどうまかいしゆみの北谷とつうりきじぎいのほうをわかれと思へばなごりおしくて袂にすがれはかげろふいなづまてにもとられずめにもみへずかたちはきへてうせてけりはつと思ふてあくどう丸たゞきへぐと成けるがまなこをひらきよくみればやつはしもとのしなのなるとがくし山にぞいたりけるまつせのきどく是成べしと皆かんぜぬ者こそなかりけれ

戸隠山に戻った悪童丸は、父母の安否を確かめに越後へと急ぐが、父は八十年以前に、悪童丸が帝に背いた咎で切腹、母はそれを悲しんで死んでいた。これを知った悪童丸はこの仇を討たずにおくものかの一念で悪鬼となり、雲に打ち乗り、都を指して上っていく。

都に着くと東山に立て籠もり、酒典童子と名乗って自在天の茨城童子、石熊童子、金熊童子、とらくまどうじ、とらくまどうじ、とらくまどうじ、とらくまどうじ、虎熊童子の四人を従えて比叡山へと急ぐが、伝教大師と毘沙門天、さらに

多聞天たもんてんに追い出され、その後、丹波の国の大江山に立て籠もり、さまざまの悪事をなすことになる。

註 国立国会図書館デジタルコレクションに「酒典
童子若壮 2 卷」(DOI 10.11501/2533279) の

画像がある。「古浄瑠璃正本集 第三」(校訂・横
山重 角川書店) にも翻刻がある。